

## 一九四五年八月

吉田南中学校 二年 南 優衣香

一九四五年八月六日、広島に原子爆弾が落とされ、さらに九日には、長崎に二回目の原子爆弾が落とされた。どちらも、いつもの一日を、これからの毎日を一瞬で悪夢へと変えた。一発の爆弾で、何十万人もの人々が一気に犠牲となった。

今年で終戦七十五年の年となり、七十五年前のあの日、日本は「もう二度と戦争はしない」と誓う。また、戦争の悲惨さを後世へ伝えていくため、被爆者の講話、原爆ドームなどの施設も残されている。今思い返せば小学生の頃、戦争に関する漫画、絵本を読んでいた記憶がある。「戦争」に対して、大した考えがあつたわけではなく、「ただ」読んでいただけだった。しかし、これだけはずっと思っていた。「戦争は怖い」と。戦争を経験したことはないけど、もし今、空から爆弾が落とされたとしたら……と考えると、とても怖かった。

ここで、私が読んだ丸木俊さんの「ひろしまのピカ」という絵本の紹介をする。本は広島の日常からはじまる。そして、お父さん、お母さん、みいちちゃんの三人家族が朝食を食べている場面。みいちさんは七歳の女の子である。仲良く、楽しそうに食卓を囲み、「うまいのー」と朝ご飯をほおぼる様子が普段私たちが当たり前だと思っている風景と一緒に、平和だと感じる。そのとき、突然ピカッと青白い光が部屋を突き抜け、さっきまでいつもの日常がそこにあつたのに、事態は急変する。辺りは真っ暗になり、静まりかえる。お父さんの体には穴があき、三人は広島の町をにげ回る。

——私がもしこの場にいたら、どうなったのだろうか。広島は見渡す限り焼け野原となり、一発の原子爆弾で大勢の人が亡くなった。そのとき助かった人たちも、その後、血を吐いて亡くなっていた。原爆の熱線と共に、放射能という人体に有害なものを浴びたせいで、

少しずつ体の内側からこわれていく。

この絵本を読み、私は改めて戦争に対する考え方を改めた。今まで私は「今の時代は平和でよかった」と、原爆のことに對して、どこかごとだったのだと思う。でも「ひろしまのピカ」をよみ、平和な世がどれだけ恵まれているのかということを感じることができた。日本は、長い時間をかけて平和な国を作り上げてきた。たくさん人の思いを受けて、この国はできている。

ところで、「被爆者」の戦争体験を聴くことができる世代は、もう本当に、私たちの世代でぎりぎりらしい。終戦七十五年。つまり七十五歳以下の世代は、戦後生まれということになる。私は以前、戦争を体験している人が親せきにいるのかと母にたずねたことがある。聞いたかぎりでは、誰もいなかった。その時、本当に戦争が遠い昔の話であるような感じがした。もちろん、悲惨な戦争体験を直接きくことができなかったとしても、本や映画、建造物など、様々な方法で戦争の悲惨さを学ぶことはできる。しかし、受け身で待っているばかりではだめだということを、私は最近になってようやく気がついた。

七十五年前の、終戦を告げられたあの日。あの日から日本は長い時間をかけ、今の平和な世の中を作り上げてきた。でも「今」に至るまで、日本は多くの犠牲があつたことを忘れてはいけない。戦争は絶対にゆるしてはいけない。だけど、その苦痛があつたからこそ、日本はまた前に進めたのだと私は思う。

私たちにできることは、まず「平和」がどれだけめぐるまれていることを伝えていくことだと思う。悲惨な戦争を通し変化してきた日本。戦争は許さない。許されない。私は平和の大切さを伝えていきたい。